

地域コレクティブの可能性——西陣をケーススタディとした「かざり」の文化からの考察

琴浦香代子(無所属)

本発表は、西陣の地蔵盆の「かざり」の文化を手がかりに、「地域コレクティブ」の意義とその可能性について考察する。単なる地域振興のラベルではなく、コレクティブとは多元的主体の創造的連携により、相互関係的な実践を通じて協働・創発を行う広義の創造的行為の集合体である。その様相を示す為に、かざりによる技の共有・継承と創造力で地域を強化する仕組みを考察して、「地域コレクティブ」の成立条件を探る。地域とコミュニティの語が曖昧に混用されている中で、発表者があらためて「地域」に着目するのは、これまでのフィールドワークを通して、住民自身が場所に根差した記憶、場所への帰属意識が強く現れており、職住一体や高度分業を含めた西陣ならではの歴史的重層性を踏まえると、既存のコミュニティ概念では捉えきれない実相を発見・認識したからである。西陣は織業を軸として発展し、歴史の早い段階から「町(ちょう)」という地域的枠組みを作り出して、高度織物技術と分業体制、美術・工芸・工業を包摂する連関構造を長らく保ち続けた。その点において西陣は、自律性と創発性を示す最適な地域のケーススタディであると考えた。

「政・祀・祭」(まつりごと)という政治・信仰・祭礼の総体が、西陣の変成を牽引し、価値観と創造性の基盤となっていると発表者は考える。なかでも、地蔵盆は他地域と同様に生活に密着した行事であり、小さな単位(町単位)で行われる。祈りと共に地域の結びつきや子の成長を願う文化として機能しており、古い素朴な石仏(お地蔵さん)が多く残る西陣では、住民が居住する町家内部での開催の多さ、西陣織による華やかなかざりを特徴としている。かざりは複数の視点(歴史／美術／宗教／民俗的ルーツ)から研究されているが、「かざす」「かざる」を語源として、「美しく見せるために何かを添える」「外見を整える」という意味が、「かざり」へと展開していったと考えられている。平安時代には威厳や格式、象徴性を帯びた意匠となり、江戸時代には装飾的絵画(琳派)の美学へと昇華するなど、日本の意匠感覚として発展してきた。「政・祀・祭」においては、常に地域の構成者である多様な技能集団としての「コレクティブ」によるかざりの文化がある。祭とかざりは単なる伝統の再生産ではなく、共創の場づくりとして、(1)高い技術を活用して荘厳と日常が重なる世界観を生み、(2)技術と経済の循環が住民の繋がりと互いの尊重を可視化し、(3)地域を精神的、経済的に豊かにしていく意思と助け合い精神が祭の姿となって、結束力と創発性を生み出していることを明らかにする。歴史・宗教・民俗・美術などが共存する文化的複合性と歴史的重層性を美学から捉えることは、現代の創造性・社会的実践としてのアートの枠組みを拡張していく契機となるのではないだろうか。